

「ビジオ」「H&M」先取りチェック

大阪ビジネスホテル覆面宿泊

個人生活を刺激する流行情報誌

日経トレンドィ

TRENDY

MAY 2008

5

毎月1日発行
通巻278号 2008年5月1日発行
1988年2月26日第三種郵便物認可

「42型9万円テレビ」「H&M」が上陸寸前

安けりゃ、いいのか!?

このテレビも、洋服も、PB食品も、
すべて話題の「低価格ブランド」。
値上げ時代の救世主? それとも?
実際に買って、厳しくチェックした

大阪編!

ビジネスホテル格付け

新製品ラッシュの季節だ

ビデオカメラ 全評価



定価 550円
日経ホーム出版社



ビジオは薄型テレビの「黒船」か

安さの理由

工場なし、社員105人 外注体制でコスト削減

安さの理由は、その徹底した外注体制にある。ビジオは工場を持たない。自社では企画と販売、サポートのみを担当。設計や開発、製造は、台湾や中国のEMS（受託生産）企業に委託する。そのため20億ドルの売り上げを、わずか100人ほどの社員で達成している。部品にもコストはかけない。大手メーカーのように部品を自社開発せず、安い汎用品を調達して組み立てる。日本ではパイ・デザインなどが似たビジネスモデルだ。

■外部比率を高めて、安く仕上げる

	ビジオ	大手メーカー
社員	105人	数万人
工場	なし	あり
企画	自社	自社
設計	外部委託	自社
搭載パネル	外部調達	自社開発/外部調達
搭載部品	汎用品が大半	独自部品が多い
画像エンジン	非搭載	自社開発
製造	外部委託	自社
販売	自社	自社
宣伝費	あまりかけない	億単位
サポート	自社	自社

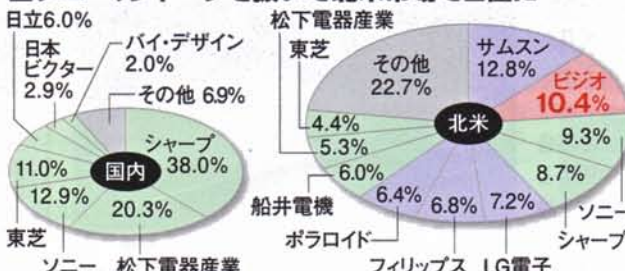
北米シェア2位に躍進したビジオ 衝撃価格で日本市場も制するか

「ビジオ」は米国の新興テレビメーカーの社名であると同時にブランド名。03年に参入し、常識外れの低価格路線で06年ごろから急成長。07年は北米におけるシェアが台数ベースで10%を突破した。06年には約7億ドルだった売上高は、07年には20億ドルに達した。

■42型で9万円! 衝撃の低価格で北米を席巻

サイズ	ビジオ	シャープ		パイ・デザイン
	北米	国内		
20型	約4万円	約8万円	約9万円	約6万円
26型	約5万円	約10万円	約14万円	約8万円
32型	約6万円	約13万円	約18万円	約10万円
37型	約8万円	約16万円	約24万円	約12万円
42型	約9万円	約18万円	約30万円	約14万円

■ソニー、シャープを抜いて北米市場で2位に



注) 上の表は主力モデルの実勢価格、グラフは07年の台数シェア(ディスプレイサーチ調べ)

薄型テレビ市場に黒船が来襲しようとしている。「42型9万円」という衝撃の価格で北米市場を席巻する米ビジオが、日本への上陸を虎視眈々と狙っているからだ。ビジオのウィリアム・ウォンCEO(最高経営責任者)は「日本進出に向けて」現在、複数の日本企業と話し合っている」と話す。

42型は国内大手メーカーならば20万〜30万円する。それがわずか9万円。なぜ、そこまで安くできるのか。

ビジオは米カリフォルニアに本社を構える新興テレビメーカー。他を圧倒する安さを武器に売り上げを急激に伸ばしている。北米における07年のメーカー別シェア(台数ベース)は10%を突破。日本のソニーやシャープを抜き去り、韓国サムスンに次ぐ2位にのし上がった(ディスプレイサーチ調べ)。

同社は工場を持たず、自社では企画と販売、サポートだけを手がけるのが特徴。設計や開発、製造は台湾や中国の企業に委託する。社員はわずか105人だが、売上高は年間で20億ドル(約2000億円)に達する。設備投資や宣伝費をけかないで徹底的にコストを削減する。これが激安の理由だ。

とはいえ日本の消費者は世界一、品質に厳しいといわれている。「内部の部品は自社で開発せず、汎用品を組み合わせて製造する」とウォンCEO自身が明かすビジオは、激安テレビとい

①画質

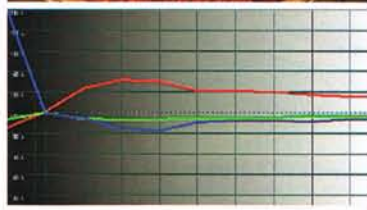
低価格機としては最優秀 設定次第で赤みは改善

総合的に国内低価格機より優秀。動画ボケは少なめで、解像感は東芝にも迫る。白と黒の再現性もいい。ただし視野角は狭め。全体に赤みを帯びているが、米国の照明環境向けの設定のため。もともとの発色バランスはいいので、設定を変えることで改善できる。

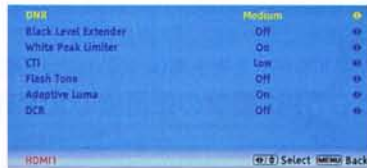
⑥視野角は狭め。ダイナコネクティブやユニデンに劣る。夜空が映った画面を斜めから見ると、白みがかかる⑦難しい暗部の階調表現も比較的優秀。黒浮きや白飛びが少ない



①解像感は高く、動画ボケも少なめ。シャープネスは多少強くエッジに偽色もあった



①②全体に赤みを帯びている③RGBヒストグラムで見ても赤が強い。「明るさによって赤のレベルが変わるのは気になる」(鴻池氏)



④色温度を詳細設定できるなど設定項目は多い。東芝に次ぎ、パイ・デザインと並ぶ

②音質

パワフルだが粗めの音 設定項目は標準レベル

音域は国内低価格機よりも広く、低音域も比較的に出る。全体にパワフルでシャープな音だが、中高音域に若干のクセがある。他機種と同様、サラウンド機能は搭載。設定項目は国内低価格機と同等で、東芝ほど細かく調整できない。



⑤スピーカー出力は10+10Wと高い。最大音量にしても破綻しない。ボディの共振もなかった

検証

3人の専門家が多角検証 想定外だったビジオの性能

ビジオ42型と国内3社の40~42型低価格機を比較。東芝42型をベンチマークとした。「画質」「音質」「操作性」だけではなく、「デザイン」も含め、3人の専門家が多角的に検証。画質は定量測定も実施。結果、ビジオは意外な強さを見せた。

チェック方法

①画質

ブルーレイ・ディスク (BD) レコーダーから出力した映像 (地上デジタル放送、ブルーレイソフト) を HDMI でテレビ本体に入力して検証。標準モードで、ニュース、映画、スポーツなどのコンテンツの映像を目視で評価したほか、HD映像計測ソフトで画質を定量測定した。

①BDの再生と出力には「DIGA DMR-BW900」(松下電器産業) を使用



②テストに使ったBDソフト「桜」とHD映像計測ソフト「Hi-Definition Reference Disc」



③色彩と輝度などの検証には業務用の計測機器「CS-200」(コニカミノルタ) を使用した

②音質

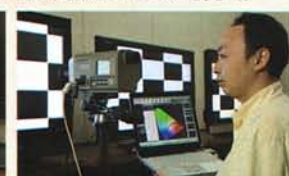
低音から高音までバランスはとれているか。音量を高めても音は破綻しないか。音質は薄型テレビの弱点。スピーカーは構造上、薄型化が難しいからだ。大手メーカーも克服しきれない壁でもある。

③操作性

低価格機には動作が遅くストレスがたまる機種も多い。リモコンの感度、設定画面の操作感を見た。ビジオ以外については、EPG画面の一覧性やチャンネル切り替えの速度なども調べた。

④デザイン

低価格機は、ボディや、リモコンなどの細部にコストをかけない傾向がある。建て付けが悪い機種も多い。ボディの質感やデザインなどリビングへの設置に堪え得る高級感はあるかも見た。



⑤AVコンサルタントの鴻池賢三氏。画質性能の計測のほか音質、操作性、デザインも検証
⑥AV評論家の麻倉伶士氏。画質と音質を分析⑦プロダクトデザイナーの酒井俊彦氏。ボディとリモコンのデザインを評価



言葉からイメージされるような「安からう、悪からう」ではないのか。だが北米では、ビジオは安さだけではなく、画質や音質、デザインも評価されている。実は、その品質の高さには裏付けがある。ビジオがテレビの設計や開発、製造を主に委託するのは、ビジオの株主でもある台湾のアムトラ・テクノロジという会社だ。アムトラは液晶モニターや音響関連製品のOEM(相手先ブランドによる生産)で実績のあるメーカー。受注企業には「日系ディスプレイメーカーやパナソニック・オルフェン」といった世界有数のAVメーカーも含まれる(「テクノ・システム・リサーチ」の林秀介氏)。

デザインに凝った製品でも評価が高い。こうした背景を踏まえると、ビジオは、アムトラがOEMで培った絵づくり、音づくり、デザイン設計のノウハウを詰め込んだ製品といえる。しかし、だ。品質に厳しい日本市場でも通用するだけの実力はあるのか。ビジオを米国で購入し、日本に空輸して検証した。サイズは42型を選択。「ビジオの価格競争力がより際立つのは40型以上」(ディスプレイサーチの鳥居寿一氏)だからだ。また、その潜在能力を見極めるために、9万円のHDパネル機ではなく、約11万円(11000)のフルHDパネル機を購入した。

比較対象にしたのは、ビジオを迎え撃つ国内新興メーカー3社の40~42型機。低価格テレビの先駆けであるパイ・デザインは、筐体デザインに力を入れている。大手通信機器メーカーのユニデンは、EPGのインターフェー

LOW PRICE INSIDE AND OUT

VIZIO VS42LF HDTV10A(ビジオ)

実勢価格 約11万円(1100ドル)

●本体サイズ・重さ／幅104.9×高さ75.7×奥行き29.0cm・22kg(スタンド含む)

42型液晶

フルHD

HDMI×2

費用対効果は高いが課題もある

コストパフォーマンスは最も高い。画質は低価格機の水準を超え、音質も薄型テレビとしては及第点。テレビとしての十分な基本性能を備える。練り込まれたデザイン性は東芝よりも評価が高かった。ただしリモコンの感度が悪いなど操作性は低く、東芝やユニデンに及ばなかった。

画質	○
音質	○
操作性	△
デザイン	◎



③操作性

操作体系はわかりやすいが
動作は若干もたつく印象も

リモコンの感度が若干悪く、カーソルの動きなどの反応速度も遅め。ただ操作体系は直感的に理解できる。日本向け製品ではないため、EPGやチューナーの性能は未知数。だが大手メーカーやユニデンのように自社開発ではないので、多くは望めないと思われる。



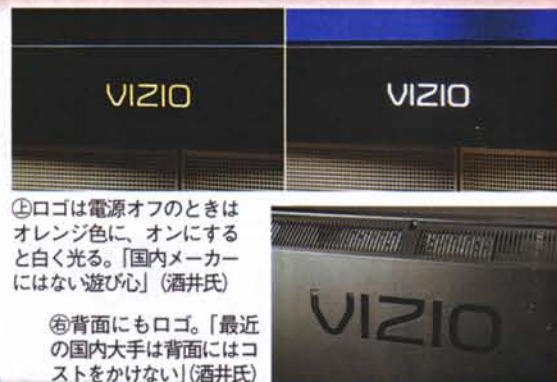
⑥リモコンは小さくてシンプル④背面のラインは手にフィットして持ちやすい



④デザイン

遊び心、背面のデザイン…
東芝機をも超える満足度

「隅から隅までデザインが行き渡っている。側面のボタンやリモコンなどはコストをかけず、デザイン力でカバー。逆にハイグロスを使ったフレーム、スピーカーの開口部、背面の設計などにはコストをかけている。換気口が目立たないように背面を設計するのは難しい」(酒井氏)。



⑤ロゴは電源オフのときはオレンジ色に、オンになると白く光る。「国内メーカーにはない遊び心」(酒井氏)

⑥背面にもロゴ。「最近の国内大手は背面にはコストをかけない」(酒井氏)

④設定画面のデザインは洗練され、かつ直感的に操作できるが、動作が遅め⑤本体側面にひと通りの操作ボタンを備えるのは、ビジオ以外は東芝とパイ・デザインだけ

欠点もある。視野角が狭いことだ。特に斜めから視聴すると画面全体が白っぽさを帯びてくる。低価格機で視野角を比べると、ダイナコネクティブが最も広く、ビジオはパイ・デザインとほぼ並んで狭い部類だった。とはいえトータル表現力は、低価格機の水準を超える。日常にニュースやバラエティといったテレビ番組を見

スなどのソフトウェアを自社開発するのが特徴。ダイナコネクティブは40型で10万円以下の価格をすでに付けている。加えて最新テレビとしての絶対評価を測るべく、画質評価が高い東芝の42型最上位機(約22万円)とも比べた。

高級機には譲るものの「想像以上」の実力だった

検証したのは「画質」「音質」「操作性」「デザイン」の4項目。評価は、AVコンサルタントの鴻池賢三氏、AV評論家の麻倉伶士氏、プロダクトデザイナーの酒井俊彦氏の3人に依頼した。画質については日本国内向けのチューナーを搭載しないビジオに合わせ、HDMI入力した映像で検証した。

UNIDEN TL42DZ1 (ユニデン)

実勢価格 16万9800円

●本体サイズ・重さ/幅110.8×高さ82.6×奥行き35.2cm・37kg(スタンド含む)

42型液晶

フルHD

HDMI×2

地上/BS/CS



操作性は練られている。画質と音質はいま一歩

色の発色は自然だが、解像感や階調表現、彩度が乏しい。画質はビジオに劣り、バイ・デザインに並ぶレベルだった。音質も凡庸。一方、操作性はダイナコネクティブやバイ・デザインより上。ただ、ボディは重量感がある割に、前後の揺れへの安定感がなかった。

画質	△
音質	△
操作性	○
デザイン	△

①画質

フォーカスが甘く解像感が低い。階調表現が乏しく、全体にベタッとした映像。特に暗部の階調がなかった。色は薄めで、ノイズも多い。パネルの隅に多少のムラが見られた

②音質

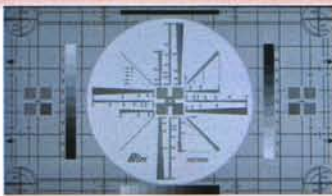
音域が狭く中音域中心。低音域があまり出ない。音の輪郭は強く人の声は聞き取りやすいが、人工的に感じるサウンド。最大出力は5+5Wと並

③操作性

EPGの情報量、全体的な動作速度は平均以上で東芝に次ぐ。リモコンは少ない数のボタンに機能を巧みに振り分けている。操作体系も理解しやすい

④デザイン

「特徴的な造形。ただパネルとフレームの間のベゼルの太さや、スタンド背面の過剰なデザインは疑問。ほかより一回り大きく見える」(酒井氏)



⑤解像感低め。動画ボケ対策はまずまず



⑥リモコンは武骨だが使いやすい。感度良好。視野角は広く、夜空が多少白い。⑦パネルとフレームの間のベゼルが太い



⑧側面ボタンはアームを使用。細部にも高級感を出す

byd:sign LF-4201DAB (バイ・デザイン)

実勢価格 13万9800円

●本体サイズ・重さ/幅104.8×高さ77.0×奥行き30.8cm・41kg(スタンド含む)

42型液晶

フルHD

HDMI×4

地上/BS/CS



外見は安さを全く感じさせないが、画質は平凡

一見鮮やかな画質だが、シャープネスがきつく、ノイズや黒浮き、白飛びといったあらが目立つ。リモコンの感度が多少悪い。チャンネルの切り替えも遅め。ただHDMI端子は4基と最多。音質も標準を超える。デザインには高級感があって低価格機と感じさせない。

画質	△
音質	○
操作性	△
デザイン	◎

①画質

解像感高め。だが動画ボケが目立つ。シャープネスが強すぎて、黒浮きと白飛びも多い。赤が橙になるなど偽色も見られた。視野角は最も狭い。パネルの隅のムラが目立った

②音質

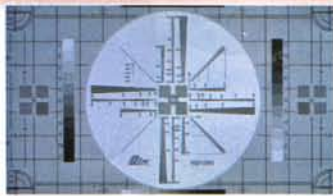
低音域が少なめだが、派手なサウンド。ただ輪郭が強められているため耳が疲れる。最大出力は10+10Wと高く、大音量でも破綻は少ない

③操作性

EPGの情報量は少なく、リモコンの感度が低め。操作体系もわかりにくい。ボタンの数が必要最低限に削ったサブリモコンが付属するのは良心的

④デザイン

「すっきりとまとまったデザイン。全体に高級感が漂う。背面も含め細部まで精密で建て付けもいい。インテリアを選ばないだろう」(酒井氏)



⑤解像感高めだが、動画ボケは目立つ



⑥2つのリモコンが付属する。⑦視野角は狭い。夜空全体が白みを帯びている



⑧側面ボタンはアームを使用。細部にも高級感を出す

るぶんには問題ないだろう。ただ映画などをじっくりと視聴すると物足りなく、国内大手を脅かすほどではない。続いて音質はどうか。薄型テレビは構造上、音質を高めるのが難しいとされるが、バイ・デザインは標準ラインには達していた。東芝に並ぶレベルで、低価格機が弱い傾向にある低音域も比較的に出ている。大音量にして正面に立つと、音の圧力も感じられた。バイ・デザインはトータルでの音質は東芝やバイ・デザインとの評価だが、低音が足りない。音楽番組などでは迫力に欠ける。ここまで画質と音質は好評だったバイ・デザインだが、操作性にはいくつかの課題がありそうだ。まずリモコンの感度が多少低めで、動作が緩慢な印象。優れていたのは東芝、続いてユニデンだった。ただバイ・デザインは設定画面のインターフェースがわかりやすい。音声設定の項目をマイクのアイコンで示すなど、操作体系を直感的に理解できる。操作性でバイ・デザインのもう一つの課題は、EPGやチューナーの性能だろう。検証したバイ・デザインは北米向けモデルなので未知数だが、ある程度の予測はできる。この点で評価が高かったのは東芝、次にユニデン。この2社はEPGやチューナーをコントロールするソフトウェアを自社開発する。だがバイ・デザインは、これまでの戦略通り外部調達するはずだ。となると、高い性能は期待できない。バイ・デザインが専門家を最も驚かせたのはデザインだった。「価格からは想像できないほどの高級感がある」(酒井氏)。ボディの背面までデザインされているテレビは大手も含めて国内メーカーで

LOW PRICE INSIDE AND OUT

REGZA 42Z3500 (東芝)

実売価格 21万9800円

●本体サイズ・重さ／幅102.0×高さ69.9×奥行き35.2cm・28.4kg(スタンド含む)

42型液晶 フルHD HDMI×3 地上2/BS×2/CS×2



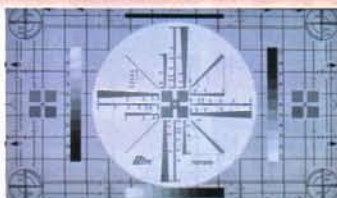
画質と操作性は最も優れる。音質は平均レベル

画質は申し分ない。唯一倍速駆動のパネルを搭載し、動画ボケも目立たない。操作性は高く、HDD接続や「アクティブ」など機能も豊富。一方で音質は平均レベル。「パネルの周囲のフレームを可能な限り狭くするために、スピーカー開口部の幅も狭めているため」(麻倉氏)。

画質	◎
音質	○
操作性	◎
デザイン	○

①画質

解像感が高く、ディテールまで表現される。視野角も広い。白飛びや黒つぶれも少なく、清涼感のある絵づくり。パネルには隅々までムラがなかった。大きな欠点はない



⑤高い解像感。倍速効果で動画ボケも少ない

②音質

音域は広く、低音まで力強い。だが周波数特性が不自然。最大出力は10+10Wと高いが、大音量にすると特定の音色で本体が共振することもあった



⑥リモコンは落ち着いたデザイン。⑦視野角は最も広かった。⑧薄いスピーカーの開口部は音質にはマイナスのようだ

③操作性

設定画面は詳細で一覧性が高く、EPGの情報量も多い。チャンネルの切り替えなど、全体に動作は機敏。リモコンのボタンが多いが配置は機能的

④デザイン

「極細スピーカーなどフレームのスリム化にはコストを惜しんでいない。側面のボタン、背面の処理などは意外と手間がかかっている」(酒井氏)



Darwin DY-40SDK350 (ダイナコネティブ)

実売価格 9万9800円

●本体サイズ・重さ／幅99.8×高さ74.0×奥行き32.9cm・22kg(スタンド含む)

40型液晶 HD HDMI×2 地上/BS/CS



最安値だが、画質に難。音質や操作性も凡庸

検証した5機種の中で唯一、パネルが非フルHD。解像感は見劣りし、動画ボケや残像も目立つなど、視野角以外の基本性能は低い。絵づくりは、シャープネスがかなり強い。暗部の階調表現の不自然さが目立った。音質や操作性も凡庸だが、価格は最も安い。

画質	×
音質	△
操作性	△
デザイン	△

①画質

視野角性能は並だが、解像感是最も低く、残像も目立つ。色調は濃いめの傾向で、多少赤い。暗部の階調が過剰に強調される不自然な映像が目立った。ノイズも多かった



⑤解像感是最も低く、残像がかなり目立った

②音質

低音域も出るが、こもり気味。音に輪郭がなく、モヤッとした印象。声などの表現が不明瞭。最大出力は10+10Wと高いが、大音量では共振が目立った



⑥リモコンはシンプルだが使いやすい。⑦感度も良好な視野角は東芝に次ぐ広さ。⑧ボディはかなりくらくつき不安定

③操作性

EGPの情報量が少なく、データ取得に時間がかかる。チャンネルの切り替えは約3.5秒、起動や動作も遅め。リモコンはボタンが大きく押しやすい

④デザイン

「つや消しの質感はいただけ。建て付けも悪く、ボディがぐらつく。細部の精度が甘い。造形は一代前の韓国製品に近い印象」(酒井氏)



⑤リモコンはシンプルだが使いやすい。⑦感度も良好な視野角は東芝に次ぐ広さ。⑧ボディはかなりくらくつき不安定

東芝には及ばないものの、10万円の差は感じさせない予想外の実力だった。基本性能である画質や音質には低価格機にありがちな破綻がなく、この価格帯ではトップレベル。デザインも高級感があり、低価格テレビのイメージを覆す可能性も秘めている。コストパフォーマンスを考えると、大手メーカーにとっても脅威の存在になり得る。

結論

10万円の差は感じない
低価格機概念を変える

総合的に見ると、ビジオの実力は低価格機のなかでは最も優秀といえる。とはいえ東芝には及ばない。特に画質と操作性には大きな差がある。だが、そこに「10万円以上の価格差は感じない」(鴻池氏)。大半の低価格機と違って「リビングに置くメインテレビとしての品格もある」(酒井氏)。東芝が搭載するハードディスクやネットワークへの接続といった付加機能が必要ないのであれば、コストパフォーマンスという点ではビジオは優れる。

はわずか。「東芝は極細のスピーカーなど、部分部分には凝っているが、トータルデザインに統一感があるのはビジオのほう」と酒井氏は評する。前面のロゴがオレンジや白に光る演出も楽しい。「フレームのハイグロス仕上げからスピーカーの開口部の塗装に至るまで、細部まで丁寧に作られている。外装は東芝よりコストがかかっているかもしれない」(酒井氏)。

激安5万円で買ってもいいののか

Darwin DY-LC19SD (ダイナコネクティブ)

実勢価格 4万9800円



●本体サイズ・重さ
幅47.9×高さ40.8
×奥行き19.0cm・
6kg(スタンド含む)

19型液晶
画素数1440×900
HDMI×0
地上

安い、画質と音質はほかに見劣り

価格は安い、画面にチラつきが目立ち、音域が狭いなど、基本性能では最も劣るレベル。ただし3色を展開するボディは、ある程度の質感がある。

画質	✕
音質	✕
操作性	△
デザイン	○

①画質

一見彩度は高いが、シャープネスがかなり強く、暗部が赤いなど偽色も多い。HD映像は縦長に表示されてしまう

②音質

最高出力は3+3Wと標準レベルだが、音域が狭く、低音域が出ていないため貧弱な印象。全体に音がボケている

③操作性

チャンネルの切り替えは約3.5秒と遅い。EPGは情報量が少なく、データ取得に時間がかかる。データ放送は非対応

④デザイン

「新しくはないが無難なデザイン。コストはかけていないが、意外に質感がある」(酒井氏)。首振りには上下左右



PRODIA PIX-YT010-P00 (ピクセラ)

実勢価格 5万4800円



●本体サイズ・重さ
幅50.9×高さ39.7
×奥行き9.0cm・8kg
(スタンド含まず)

20型液晶
画素数1366×768
HDMI×1
地上

欠点は少なめで、費用対効果は高い

20型では最安値ながら、画質、音質ともに及第点。操作性に難はあるが、コストパフォーマンスは高い。デザインにも安っぽさは感じられない。

画質	○
音質	○
操作性	△
デザイン	○

①画質

白の階調が少し足りないがコントラスト比は十分。色彩は華やかで好感が持てる。視野角は低めで特に上下に弱い

②音質

音域が狭めで声を聞き取りづらいが、バランスが比較的良いので全体にはまとまっている。最大出力は2.5+2.5Wと並

③操作性

チャンネルの切り替え速度は並だが、リモコンの感度がやや鈍い。EPGの情報量は少ない。データ放送は非対応

④デザイン

「フレームにアクリルを使うなど、価格からは想像できないほどコストがかかっている」(酒井氏)。首振りには上下



19~20型の小型テレビは、寝室などに置く2台目としての需要が高まっている。昨年12月にドン・キホーテがPBで参入したほか、国内新興メーカーによる低価格機も増えた。

価格帯は、PBや新興メーカーの低価格機は5万円以下から、NBの高級機は9万円前後までと幅広いが、性能はそこまで違うのか。40~42型同様に3人の専門家が「画質」「音質」「操作性」「デザイン」を検証。地上デジタルチューナーを搭載した低価格機7機種とNB1機種を比べた結果、価格差に見合うだけの性能差があることがわかった。NBの代表としては売れ筋のシャープ20型を評価したが、画質、音質の基本性能で他を圧倒した。操作性も申し分ない。EPGの情報量は、低価格機標準クラスの3倍以上ある。

逆に低価格機は、画質や音質以前の

マイナスポイントを抱える機種も多かった。例えばバイ・デザイン19型はリモコンの感度が極めて悪く、ザッピングしているストレスがたまる。

画質では、画面のアスペクト比(縦横比)に問題がある機種が目立った。ダイナコネクティブ19型、ドン・キホーテ19型と20型、バイ・デザイン19型と20型の5機種はいずれも、普通のテレビでは16対9であるアスペクト比が16対10。安いパソコン向けのパネルを使用しているためとみられる。

しかもバイ・デザイン20型以外の4機種は、地上デジタルなど16対9のHD映像を16対10と縦長に映す。そのため縦横比が狂ってしまう。パソコンのモニターならいいが、「テレビとして大きな問題といえる」(麻倉氏)。

こうした構造的に課題のあるテレビを消去していくと、シャープ以外には、

ピクセラ20型、ユニデン19型が残る。特にピクセラは20型で実勢価格5万4800円と値ごろ感もある。実はこの安さには裏がある。米国では「ピジョ」ブランドで販売されている機種に、ピクセラが手を加えたモデルなのだ。安いテレビには訳がある。それを見極めて製品を選ぶ必要があるだろう。

結論

価格だけで選ぶのは早計
安い機種の機種は限られる

シャープは価格差に見合う性能を示した。低価格メーカーのテレビの多くには、欠点も目立った。激安価格だけに釣られないほうがいい。総合的に評価して「買ってもいい」と薦められるのはピクセラ20型とユニデン19型。

LOW PRICE INSIDE AND OUT

byd:sign LW-1905DWE (バイ・デザイン)

実勢価格 5万9800円



●本体サイズ・重さ
／幅48.0×高さ39.6
×奥行き17.3cm・
10kg(スタンド含む)

19型液晶
画素数1440×900
HDMI×0
地上

リモコン感度が悪くストレスがたまる

ほかと比べて画質、音質ともに見劣りするが、それ以上にリモコンの反応の悪さと動作の遅さにストレスがたまる。ボディには高級感がある。

画質	×
音質	×
操作性	×
デザイン	◎

①画質

ノイズが多く、全体に緑がかっている。暗部の階調表現が足りず、解像感も低い。HD映像は縦長に表示されてしまう

②音質

高音域が際立ちすぎていて、金属調の不自然なサウンド。最大出力は5+5Wと優秀だが、それを生かしていない印象

③操作性

リモコンの感度が極めて悪い。EPGの情報量は少なくはない。操作体系もわかりやすい。データ放送は非対応

④デザイン

「背面に持ち運び用のハンドルを備えつつ、全体が破綻していない。細部の精度も高い」(酒井氏)。首振りも上下



UNIDEN TL19BX1 (ユニデン)

実勢価格 5万4800円



●本体サイズ・重さ
／幅47.5×高さ46.5
×奥行き21.5cm・9
kg(スタンド含む)

19型液晶
画素数1440×810
HDMI×1
地上/BS/CS

基本スペックは充実、AV性能も及第点

3波チューナー、HDMI端子、データ放送対応など、19型では充実したスペックのうえ、画質、音質、操作性も合格点。色は白と黒から選べる。

画質	○
音質	○
操作性	○
デザイン	△

①画質

バランスに優れた品のある絵づくり。コントラスト比と解像感も高め。シャープに比べると暗部の階調表現が劣る

②音質

最大出力は3+3Wと並だが、音の情報量が多く、音域も比較的広い。スピーカーの大きさと相まって臨場感を生む

③操作性

チャンネルの切り替えが約2.5秒と早いなど動作はきびきびしている。EPGの情報量は並以上でシャープに次ぐ

④デザイン

「造形に無理があり、スピーカー周辺の仕上がりがよくない。前面のパネルは操作しやすい」(酒井氏)。首振りも上下



Prebis ZG-0019P3G (ドン・キホーテ)

実勢価格 4万9800円



●本体サイズ・重さ
／幅50.0×高さ40.2
×奥行き23.1cm・7.5
kg(スタンド含む)

19型液晶
画素数1440×900
HDMI×0
地上/BS/CS

3波では最安値。画質と音質は平凡

3波チューナー、データ放送対応など、ドンキ20型より充実。操作性も並以上で、総合力はこちらのほうが高い。1波モデルは3万9800円。

画質	△
音質	△
操作性	○
デザイン	×

①画質

ノイズは多いが、発色は自然。ただコントラストは低く動画ボケが目立つ。HD映像は縦長に表示されてしまう

②音質

音域は並だが、輪郭ははっきりしている。ただ誇張されすぎて、聞いていると疲れる。最大出力は2.5+2.5Wと標準

③操作性

チャンネルの切り替えは約2.5秒と早いなど全体に動作は軽快。操作体系もわかりやすいが、EPGの情報量は少ない

④デザイン

「汎用品のボディ。建て付けが悪くグラグラする。あまりコストをかけてはいない」(酒井氏)。首振りも上下左右



AQUOS LC-20D30 (シャープ)

実勢価格 8万9800円



●本体サイズ・重さ
／幅52.1×高さ42.5
×奥行き18.0cm・7.7
kg(スタンド含む)

20型液晶
画素数1366×768
HDMI×3
地上/BS/CS

約4万円の価格差に相応する高性能

画質、音質、操作性いずれも優れ、価格差に見合う性能。画面の角度は上下に変えられないが、視野角が広いので問題ない。カラーは5色ある。

画質	◎
音質	◎
操作性	◎
デザイン	○

①画質

すべてで他を圧倒。視野角は上下ともに広めで、動画ボケも比較的少ない。映画のフィルム感を唯一表現できた

②音質

音域のバランスが良く、特に高音の響きに優れる。唯一サラウンドに対応。最高出力は5+5Wとクラス最高レベル

③操作性

リモコンの感度、応答速度ともに最も優れる。チャンネルの切り替えは約2秒と早い。EPGの情報量はほかの3倍以上

④デザイン

「凝っていてデザイナーの主張が強い。そこが好みに合えば飽きずに長く使えるはず」(酒井氏)。首振りも左右



byd:sign LW-2030DHC (バイ・デザイン)

実勢価格 6万4800円



●本体サイズ・重さ
／幅56.8×高さ43.4
×奥行き21.9cm・9kg
(スタンド含む)

20型液晶
画素数1680×1050
HDMI×1
地上

デザインは魅力だが、それ以外は凡庸

全体的に赤みを帯び、白と黒も多いなど画質は中の下。操作感も中庸。デザインは評価が高かったが、リモコンはボタンの配列が使いにくい。

画質	△
音質	△
操作性	△
デザイン	◎

①画質

解像感、視野角は並。ただ輪郭を強調しすぎてノイズ、白飛びが多い。色彩バランスも悪く、全体に赤みを帯びる

②音質

中音域だけに特に低音が弱い。音の輪郭がぼやけ、声が聞きづらい。周波数特性も不自然。最大出力は2+2Wと低め

③操作性

動作は全体的にもったりした印象。EPGは情報量が少なく、データ取得に時間がかかる。データ放送は非対応

④デザイン

「少し分厚く、フレームも広めの印象だが、裏面や側面ボタンなど細部まで練られている」(酒井氏)。首振りも上下



Prebis WS-TV2001 (ドン・キホーテ)

実勢価格 6万3000円



●本体サイズ・重さ
／幅49.3×高さ42.5
×奥行き21.5cm・6.5
kg(スタンド含む)

20型液晶
画素数1680×1050
HDMI×1
地上

画質と音質は平凡。デザインは独特

発色が薄めで、音域も狭いなど基本性能は平均以下。額縁のようなフレームがパネルを包むデザインは独特。2種類のカラーリングを用意する。

画質	△
音質	△
操作性	△
デザイン	△

①画質

色は薄く、赤が橙になるなど多少不自然。解像感が高めだが、動画ボケが多い。HD映像は縦長表示されてしまう

②音質

音域が狭い。最大出力は3+3Wと並だが、音が薄く立体感があまりない。スピーカーから前方に音が出てこない

③操作性

チャンネルの切り替えは約3.5秒と遅い。EPGは情報量が少なく、データ取得に時間がかかる。データ放送は非対応

④デザイン

「色使いは独特だが好みは分かれそう。ボタンなどの部品も汎用品で、精度が低い」(酒井氏)。首振りも上下左右

